ART PAPER
アートペーパー 89
名古屋市美術館ニュース　2012年春号
Nagoya City Art Museum

特集

不思議な出会い。三つの作品をめぐって

「縁は異なもの」ということわざは、男女の出会いの不思議について語った言葉のようだが、男女の間に限らず、どんな出会いにも不思議がついてまわる。美術品の収集は、作品とコレクター、あるいは作品と美術館との出会いといえるだろうが、そこにも様々な不思議が満ちている。無数の男女の中からたった二人が出会い、生涯をともにしていくことが、いくつもの偶然と必然が重なり合った一つの奇跡であり、それを「縁」と呼ぶとするなら、美術品の収集も「縁」を抜きにしては語れない。名古屋市美術館には、現在5000点を超える作品が収蔵されており、それぞれの作品に「縁」にまつわる物語があるが、ここでは三つの作品の「縁」について触れてみたい。その三つの作品とはディエゴ・リベラの《プロレタリアの団結》、フリーダ・カーロの《死の仮面を被った少女》、そしてジョン・スローンの《ヴィレッジ監獄の解体》である。この三点はいずれも、名古屋市美術館の収集方針の一つ「メキシコ・ルネサンス」に属するもので、1920年代末から1930年代の後半にかけて、すなわち大恐慌から戦争へと向かう時期に描かれたという共通項を持っている。また、三点とも名古屋市美術館が収集する前は、アメリカの個人コレクター（それぞれ別の）が所有していたという点でも共通している。結果的に見れば、三点とも名古屋市美術館と強い「縁」で結ばれていた作品であり、収集方針を梃子にした美術館の情熱と努力がその「縁」を偶然ではなく必然のものにしたということもできるだろうが、ここで述べたいのはそのような「縁」ではない。実はこの三点は、それぞれが強い絆で結ばれているのである。一人の女性の存在が、作者も制作年も異なる三点の作品を強く結び付けている。その女性の名をルシエンヌ・ブロックという。

ここに１枚の写真がある。制作途中のリベラ作《プロレタリアの団結》の前でポーズをとるフリーダ・カーロの姿が記録されている（図１）。制作用の足場に肘を付き、やや憂いを帯びた表情でこちらを見つめるカーロの視線には、いつもの鋭さは見当たらず、どことなく寛いだ感じすら漂っている。この写真を撮影したのがルシエンヌ・ブロック。当時24歳のブロックは、２歳年上のカーロの良き友人であり、リベラの絵画制作のアシスタントを勤めていた。

図１：《プロレタリアの団結》の前のフリーダ・カーロ。1933年
Photograph by Lucienne Bloch（1909-1999）Courtesy Old Stage Studios

スイスのジュネーヴに生まれたブロックが家族とともにアメリカに移住したのは、第一次大戦中の1917年。彼女が８歳の時のことである。両親ともに音楽家という家庭で育った彼女は、幼い頃からあらゆるジャンルの芸術に関心を示したが、とりわけ美術に強い興味を抱いた。そして15歳でクリーヴランド・アート・インスティチュートに入学すると、翌年にはパリにわたり、ブールデルに彫刻を、アンドレ・ロートに絵画を学んだ。その後イタリア旅行などを経て、オランダでガラス工芸を学んだ彼女が再びアメリカに戻るのは1931年、22歳の時である。この年の11月、ブロックはその後の彼女の運命を大きく変える出会いをニューヨークで経験する。それがディエゴ・リベラとの出会いであった。

12月23日から始まるニューヨーク近代美術館での個展の準備のために、リベラがメキシコを離れニューヨークに到着したのは11月13日のことである。その３日後の11月16日、市内のレストランでリベラを歓迎する夕食会が催されたが、偶然にもブロックの席はリベラの隣だった。同じ芸術家同士ということもあったが、英語のできないリベラのために、フランス語の流暢なブロックが相手を務めるという配慮もあったようである。20代から30代前半の多くをパリで過ごしたリベラは、ブロックに劣らずフランス語に堪能であった。この時リベラは45歳。ブロックとは親子ほどにも年齢の開きがあり、芸術家としてのキャリアにも雲泥の差があったが、初対面の二人はすぐに意気投合し、夕食会の間中ひたすら二人だけで話しを続けたのである。

途切れることのない二人の会話は、主賓であるリベラを無名の芸術家が独占したような観すらあったが、その様子を離れた席から見ていた妻のフリーダ・カーロは、若い娘が夫を誘惑しているのではと邪推し、食事の後で挨拶をしようとしたブロックに対し「あなたなんか大嫌いだわ！」と言い放った。この誤解は間もなく解け、二人はそれから７年間にわたって親友となるのだが、それは夕食会の翌日からブロックがリベラのアシスタントを務めることになったからである。ヨーロッパ

明日を呼ぶ私の記憶

過ぎ去って気がつく ❶

美術評論家　**中村 英樹**

1969年春、彫刻家の野水信さんから「朱泉会会報」（第20号）に寄稿してほしいという依頼が突然舞い込んだ。「朱泉会」というのは、野水信（1914−84年）が写真家の後藤敬一郎（1918−2004年）、画家の真島建三（1916−94年）とともに結成し、定期的に展覧会を開いていたグループの名称で、その「第17回展」（同年４月22−26日、愛知県美術館＝当時）のためにコメントが欲しいとのことだった。

抽象的な形体を石材で追求する彫刻家に、青柳ういろう総本家を継ぐ前衛写真家、シュールレアリスムに根差す画家というジャンルも作風も異なる三人が固く結びつくのは、なぜか。自分にないものに目を見開くことがお互いに大切だったのかもしれない。28歳だった私は、生意気にも、「花がつねに新鮮でありうるのは、土壌、気候、風土に適応し、養分を吸収しながら、枯死ー再生という自己否定のリズムを奏でているから。美術が動脈硬化を起こしたり、ドウデモイイモノにならないで済む起死回生の秘訣も、そんな花からつくった煎じ薬に隠されているのでは･･･」（一部修正）と書いた。

それがきっかけだったのか、翌70年４月から野水さんが教える名古屋造形芸術短期大学で、私は「芸術概論」の講義を受け持つことになった。同年４月22日の「朝日新聞」（名古屋本社版夕刊）の「芸術論理の転換」と題したインタビュー記事で、私は、「現代芸術について、第一に作家自身が事物の世界に投出され、肉体を持った相対的存在であること、第二に芸術は内面世界にささえられるのではなく、事物の未知の姿を発見していくべきだということを手がかりにして考えてみる必要がある」と話している。

その新聞の日付は、奇しくも、前年の「朱泉会展」初日と同じである。野水さんには、他者との関係のなかで自分を相対的な存在としてとらえ、自分の知らないものを受け入れようとする気持ちがどこかにあり、私を招いてくれたような気がする。美大教育には、実技科目と講義科目の有機的な関係が欠かせないという思いもあったに違いない。それは、美術評論家の三木多聞さんや中原佑介さんに定期的に講義を依頼していたことからもわかる。ライバルとも言うべき抽象彫刻家の堀内正和さんに学生指導に加わってもらうといったところにも、心の広さが表われている。

1966年に愛知県立芸術大学、67年名古屋造形芸術短期大学（現・名古屋造形大学）、70年に名古屋芸術大学が開学した。2012年の今、改めて美大教育の在り方が問われている。

野水信《二つの石を貫く円筒》1978年

時の話題

東日本大震災から１年。美術に何ができるのかと立ち止まって考える大切さも認識している一方で、時間は容赦なく過ぎていきます。少ないながらも昨年活動したことを振り返ってみます。

当館ボランティアから「義援金を集めて被災地に送りたい」と相談を受けたのが昨年３月末。支援先を検討しているうちに「生活支援が第一なのは理解できるが、私たちならではの支援がしたい。被災地の美術館を支援する募金はないのか」と問われたものの、当時それらしきものを探し当てることは出来ず…。ないものは作ればいいと、震災から約１ヵ月となる４月10日に国内の美術館・博物館が登録する任意団体・全国美術館会議の会合で募金設立の提案をしました。紆余曲折を経て５月末に募金が発足。加盟各館の協力と来館者の皆様のご厚意により、これまでに多くの支援金を賜っています（当館でも２月末までの累計で60,917円の募金をお預かりしました）。心よりお礼を申し上げます。

７月には被災した陸前高田市立博物館の所蔵美術品の救援活動に参加しました。詳しい内容は紙面の都合で割愛しますが、「大切な作品を守りたい」と多くの関係者と心を一つに活動できたことは学芸員の本務を再認識する貴重な体験でした。

救援活動を終えた翌日は岩手県立美術館を訪れました。震災の影響ですべての特別展が中止を余儀なくされ、所蔵品による展示と教育普及活動を中心に展開しているとのことでしたが、吹き抜けの明るいフロアには色とりどりの木片で作られた可愛らしい積み木の家や建物が並び、「ユメノマチ」として展示されていました。普段ならさほど気に留めない光景が何故かいつも以上に鮮やかに眩しく見えて、内からこみ上げてくるものと相まって涙が出ました。わずか３日間の滞在で瓦礫の山に目が慣れてしまったことを思い知らされました。

展示は、岩手県美の教育普及スタッフが被災地のこどもたちのために行った出張ワークショップの成果でした。被災者の心情を慮ることなしに、美術に何ができる？の問いには答えられません。「色を届けてあげたい」という答えを導き出した発案者の想像力に惜しみない拍手を送りつつ、次にできること／すべきことは何かを考えています。(3)

滞在中にイタリア各地で見たフレスコ画の美しい色調に心を奪われていたブロックは、リベラとの会話の間中この技法について幾度も質問を重ねていた。そして、近代美術館での個展のために、翌日からリベラがフレスコ画の制作に取り掛かることを知ると、大胆にもアシスタントを買って出たのだが、驚いたことにリベラはすぐに快諾したのである。こうして、それから数年間にわたりブロックはリベラの壁画制作を手伝いながら、間近でそのフレスコ技法の全てを学ぶことになる。

個展が始まるまでの１ヵ月間、ブロックはリベラのアシスタントを務めながら、フリーダとも一緒に買い物をしたり映画を観たりして親交を深めた。そして翌年１月末に個展が終了し、リベラ夫妻が次の壁画制作のために４月にデトロイトに向かうと、一月ほど遅れてブロックもデトロイトに向かった。リベラはデトロイト美術館の巨大な壁画の制作を依頼されており、翌年３月までその仕事に没頭することになる。夫妻に合流したブロックは、リベラの壁画制作を手伝う一方、暇を持て余す妻の相手をして欲しいというリベラの依頼を受けて、フリーダとの関係もさらに深めていった。しかし、順調に見えた三人のデトロイトでの生活に悲劇が訪れる。フリーダが流産をしたのである。夫妻と同じホテルに暮らしていたブロックは、血の海の中で泣き叫ぶフリーダと錯乱状態のリベラの姿を生々しく日記の中に記録している。自分はもはや愛する男の子供を産むことができないのではないかという思いは、フリーダを絶望の淵に追いやり、以後彼女の作品の中にはしばしば失われた子供への思いが託されることになるが、名古屋市美術館が所蔵する《死の仮面を被った少女》(図２)もそういった作品の一つである。

流産から６年後の1938年に描かれた作品であるが、その制作の背後にはブロックの存在が垣間見える。この年彼女は最初の子供を出産

図２：フリーダ・カーロ《死の仮面を被った少女》1938年

するのだが、その名付け親になったのはフリーダだった。妊娠中、ブロックは医師から双子かも知れないと告げられると、フリーダに向かって「もし双子が生まれたら、一人はあなたの子にしたらいい」と伝えたという。残念ながら生まれた子供は双子ではなく、この計画は実現を見なかったが、生まれて間もないブロックの子供を抱いて満面の笑顔を見せるフリーダの珍しい写真(ブロックがフリーダを撮影した最後の写真)が残っている。親友の子供を抱きながら、生まれていれば６歳になっているはずの我が子への思いが《死の仮面を被った少女》には託されているのかもしれない。

流産から２ヵ月後、フリーダの母の危篤の知らせが届くと、未だ体調も精神も不安定な妻の身を案じたリベラの依頼で、ブロックは一緒にメキシコに向かい、一月あまりをそこで過ごした。その後二人はデトロイトに戻り、

図３：ジョン･スローン《ヴィレッジ監獄の解体》1929年

さらに数ヵ月をともに過ごした後、ブロックは一足早く1933年１月にニューヨークに戻る。その２ヵ月後、ロックフェラーセンターの壁画制作のために、リベラ夫妻がニューヨークに到着すると、再びブロックとの関係が深まっていく。このロックフェラーセンターの壁画のレーニン像を巡る騒動については、『アートペーパー』82号で触れたので詳細についてはそちらを参照されたいが、ベン・シャーンらとともに制作のアシスタントを務めていたブロックは、壁画が中断された直後の貴重な記録写真を残している。この制作中断による不満をぶつける形で、リベラが新たに向かったのがニューヨークの新労働者学校(アメリカにおける反スターリン主義の牙城の一つ)の壁画であり、冒頭に紹介した写真は、その制作中の壁画の前で撮影されている。この壁画制作でもブロックはアシスタントを務めた。

さて、ルシエンヌ･ブロックと「縁」があるもう一点の作品《ヴィレッジ監獄の解体》(図３)は、３点の中では最も初期の1929年に描かれている。作者のジョン･スローンとブロックとの直接の交流は確認されていないのだが、実はこの作品の中に描かれている解体された監獄の跡地には、1932年に女性刑務所が建てられ、ブロックはその建物の一部に壁画を描いたのである(図４)。数年間にわたってリベラのアシスタントを務めていた彼女

図４：女性刑務所の壁画を描くルシエンヌ・ブロック 1935年頃

は、フレスコ壁画の技法を自らのものとし、さらに同じくリベラのアシスタントを務めていたスティーヴン・ディミトロフと恋に落ち1935年に二人は結婚している。当時はニューディール政策の一環として「連邦美術計画(FAP)」と呼ばれる芸術家の支援計画が実施され、それを受けてアメリカ各地に数多くの(2000件を超えるといわれる)壁画が制作された。ブロックは夫とともに約50件の壁画制作に携わったが、その中の１点がグリニッチ･ヴィレッジに新たに建てられた女性刑務所だった。子供たちが遊び戯れる様子を描いたその壁画には、リベラから学んだ様々なフレスコ技法と、芸術家は常に創作を通じて社会的責任を果たさなければならないとするメキシコの巨匠の教えがはっきりと刻印されている。

こうして当初バラバラに見えた三点の作品は、一人の女性を介して強いつながりを持つことになる。偶然と見えたものが実は必然によって、一つの絆によって結ばれていたと見えてくる。三点が名古屋市美術館の収蔵品になった背後には、紛れもなく一つの意志が働いていたのだ。そんな想像につい誘われてしまう。まことに「縁は異なもの」である。(F)

展覧会の舞台裏

作品の運搬と展示11 キャプション

展示された作品の横には「キャプション」と呼んでいる説明板が付けられています。大きさは概ね縦10センチ、横15センチ程度で、作家名や作品名、制作年、所蔵先といったごく基本的な作品に関する情報が記載されています。作品を鑑賞するための補助的な文字情報ですから、もちろん作品より目立つようなことがあってはいけません。サイズは小さく、周囲の壁になじんで、極力自分を主張しないという姿勢が望ましいのですが、あまり控えめになりすぎると、鑑賞者に情報を伝えるという本来の役割が危うくなります。海外の美術館で時々お目にかかる、やたらと小さなキャプションは、そばに近寄り顔を近づけないと読み取ることができず、鑑賞の流れが妨げられてしまうこともあります。逆に、何もここまでせずともよいものを、と思うほど巨大なキャプションが付けられていることもままあります。人気作家で大勢の観客が押しかける展覧会の場合です。会場は人で埋まり、とても作品のそばに近寄ることもできず、キャプションの文字を読むこともかなわない、といった展覧会の場合は、人の頭越しでも十分読み取ることができる、通常の二倍、三倍はあろうかという巨大なキャプションが用いられたりします。作品がよく見えないのはいたし方ないが、キャプションの文字が読めないのはけしからん、とご立腹されるお客様は少なくありません。実は、展覧会への苦情で比較的多いのは、このキャプションや解説パネルに対するものです。たとえば展示作品が水彩や版画など、光に対して脆弱なために、会場の照明をかなり落とす場合があります。当然鑑賞という立場からすると細部などが見づらくなるのですが、作品の保存という趣旨が理解されているのか、あまりお客様から苦情が出ることはありません。しかし、キャプションや解説パネルの文字が小さかったり、暗いために読みづらかったりすると、途端に不満の声が寄せられます。色や形の組み合わせからできている美術品の場合は、多少条件が悪くともそれなりの鑑賞が可能だが、キャプションなどの文字情報は、読み取れなければまったく意味がないということなのでしょうが、どうもそれだけではないような気がします。というのは最近会場でお客様の様子を見ていると、補助的な文字情報に対する欲求が非常に高いと感じるからです。つまり、キャプションや解説パネルを、とても熱心に読んでいらっしゃるお客様が多いということです。ともすると作品を見ている時間より解説を読んでいる時間の方が長いのでは、と危惧するほどの逆転現象すら起きています。これを鑑賞者の成熟に伴う美術情報への欲求の高まり、と解釈すべきなのか、あるいは補助資料に依存しないと鑑賞ができない主体性の欠如と見るべきなのか、判断は難しいところです。いずれにせよ、主客逆転といった倒錯的な鑑賞態度を招き寄せないよう、美術館側には今まで以上の工夫と配慮が求められています。(F)

感想ノートから

「日本画壇の風雲児　中村正義　新たなる全貌」展

2011年11月1日(火)～12月25日(日)

1950年代、日展の日本画の希望の星であった中村正義。名古屋で初めての回顧展を開催して、当時の活躍を知っている世代を除くと、予想以上に、その名前を忘れられていることに驚かされました。

感想ノートのなかから、いくつかの感想や意見を以下に抜粋します。

知らずに来て、絵を見て、ショックを受けた！こんなすごい人がいたなんて。…こういう人のことを日本のピカソというのだろうか？▲私も会場に入った瞬間、来て良かったと感じました。チラシを地下鉄で見て、ピンときたので見に来ました。…年を追うごとにスタイルが変化していき面白かったです。舞妓さんへの思い入れが強かったようですが、なぜでしょう？源平合戦絵巻の緻密さ、オシャレさには目を奪われました。▲久し振りに心揺さぶられる展覧会でした！ご生存中にお会いしたかったです。けど、恐くて近づけなかったかも？でも、絵画の中のユーモラスな面をも感じ取り、ひとりニヤニヤ笑いながら拝見しました。現在、ここまでのエネルギーある絵が描ける若い作家はいるでしょうか？▲私もポスターにひかれて入ったクチです。最初は予想通りのものでしたが、徐々に期待を裏切ってくれました。“変化”を楽しめました。補色をこれだけバサッと使ってしまうのは、すごいと思いました。とくに、赤と緑の印象が。最初も最後も、この色が印象に残った。▲絵を見に来たのに、作者の経歴も何も知らずに見たのに、一枚一枚の絵から作者の心の声が聞こえ、何度も何度も泣きそうになりました。書の一つ一つにも、ああ、この人ならこういう事を書きたかっただろうと深く共感しました。▲中村正義、知らなかった。こんなにバラエティに富んだ作風の人だったのですね。有名な外国の画家の展覧会のときよりも、今日の方が、ずっと良かったです。ふらりと来て見てラッキー！とうれしくなった展覧会でした。(sy)

展覧会現在進行形

ポジション2012　名古屋発現代美術 ～この場所から見る世界

2012年６月２日(土)～７月16日(月･祝)

名古屋市美術館では、これまでに３回「ポジション展」と呼ばれる展覧会を開催してきました。この地方で活躍する作家さんたちの作品を展示して皆さんに観ていただき、地元の現代美術を盛り上げてゆこうという企画です。これまでに「ポジション展」に出品された作家さんたちは、その後もさまざまな場所で活躍しておられます。この地方での展示のみならず、東京や大阪など他の都市や海外で作品を発表している方もいらっしゃって、名古屋市美術館としてもとても嬉しく感じています。

今回は、約10年ぶりに開催する「ポジション展」です。サブタイトルに「この場所から見る世界」とあるように、名古屋という場所にしっかりと立ち、周囲の動向に惑わされることなくここから世界をじっくり、しっかりと見ている、そういう作家さんたちにご出品いただきたいと思いました。そして、この展覧会担当の二人の学芸員がこの地方の現代美術、特に若いアーティストたちの中に感じ取った、現実と非現実、日常と非日常の狭間を表現するような傾向も、展覧会のテーマとして浮かび上がってきます。今、「この場所」から世界を見ている若いアーティストたちがその後大きく羽ばたいて、広い世界へ出て行って欲しいなあなどと思いながら、展覧会の準備を進めています。

今回出品される作家さんは、10名です。青田真也(インスタレーション)、大﨑のぶゆき(映像)、川見俊(インスタレーション)、坂本夏子(絵画)、佐藤貢(インスタレーション)、設楽陸(絵画)、田島秀彦(インスタレーション)、判治佐江子(写真)、文谷有佳里(ドローイング、パフォーマンス)、山田純嗣(絵画、インスタレーション)の10名が、多彩な作品を展示します。また、会期中にはアーティストトークやイベントなども開催する予定です。

展覧会の会期中、名古屋市美術館は若々しくフレッシュなエネルギーで満ち溢れることでしょう。ぜひ、多くの方に足をお運びいただき、名古屋の現代美術のパワーを感じ取っていただきたいと思います。(akko)

郷土の作家たち

森北 伸(もりきた しん／1969ー)

1969年愛知県生まれ。高校時代に河合塾の予備校で、当時アルバイトで教えていた奈良美智と出会い、アーチストとしての生きかたを目の当たりにし影響を受ける。愛知県立芸術大学で彫刻を学ぶが、彫刻作品のみならずドローイングや油彩、絵巻物のような巨大絵画、それらを組み込むインスタレーションなど展示のたびに様々に作品の展開を見せる作家である。「現代美術のポジション2003」で、彼の作品の大きなテーマである人型の彫刻とドローイングを1F展示室のガラスケースを使ってインスタレーションをして注目を浴びた。森北が創り出す人たちは、どこか必死さが感じられ、惨めそうだが、滑稽でユーモラスだ。見ていると、社会の中で生きる自分の姿とも重なり、なんともいえず愛おしい気持ちになる。また、その人間たちが帰り休む場所としての「家」も、森北の作品にはよく登場する。

以前は、新聞紙やスポンジ、FRPといった素材を使用していたが、近年は、陶や木といった彫刻の伝統的な素材、つまり自然から生まれる耐久性の高い素材を使うようになってきている。2008年美濃で開催された「土から生える」展では、巨大な穴と陶器の釉薬で描いた壁画のインスタレーションを制作し、そのスケールの大きさと作品がかもし出す荘厳な美しさに驚かされた。「ものを作る」という行為の原初を感じさせるような作品だった。また、2009年愛知県美術館と共同で開催した「放課後のはらっぱ展」では、陶で制作した巨大な人の形をした彫刻作品を出品、作品を出品するのみならず展覧会の企画そのものにも携わった。

名古屋市美術館開館の年に愛知県立芸術大学に入学し美術を始めたというが、現在はこの地方を代表する若手作家として国内外で活躍している。2009年より愛知県立芸術大学准教授。後進の育成にも携わっている。これからもその作品動向から目が離せない作家である。(hina)

森北伸、ポジション2003でのインスタレーション

臼井 薫(うすい かおる／1916ー2010)

名古屋市に生まれた臼井は、1933(昭和８)年にカメラを購入し、当時、写真表現の最新潮流を紹介していた雑誌『フォトタイムス』を購読するなど、独学で写真表現を学び始めた。同誌は、ソフトフォーカスが主流であったそれまでの穏健な表現とは全く異なる、“カメラ・アイ”の機能を強く意識したストレートな表現を紹介し、「新興写真」と呼ばれたその表現では、“現実”こそがその対象となった。1937(昭和12)年には〈愛友写真倶楽部〉の第二世代である成田春陽と小此木光也に師事することになる。臼井が写真作家として本格的に歩み始めた時期、当地・名古屋においては、ストレートな表現に基づきながら、シュルレアリスムや抽象美術に影響を受けた「前衛写真」が「運動」として頂点に達した時期でもあった。だが、そうした対象に隠喩と諧謔を込めた「詩的実験」とは無縁であった臼井が、自身の方向性を見出したのは戦後になってからのことである。1950(昭和25)年、写真雑誌『アルスカメラ』誌上の月例コンテストに出品、以後年度賞を三回受賞し、また1958(昭和33)年には、写真雑誌『フォトアート』誌上の月例コンテスト年度賞の五ヵ年連続第一位を獲得するなどして、一躍全国的にその名を知られることになる。臼井を高く評価したのは、戦後各誌のアマチュア向けコンテストの審査に当たった土門拳であった。土門が提唱する「モチーフとカメラの直結」「絶対非演出の絶対スナップ」という言葉は、アマチュア写真家にとって“金科玉条”とされ、リアリズムの定義はともかくも、対象は「敗戦」後の社会、とくに「貧困」の情景に求められ、その表現は、「乞食写真」とさえ呼ばれた。

栄・広小路の路上で見かけた「物乞い」の親子に対して、臼井は見下ろし、クローズアップによって、その“悲惨”を描写する。だが、それでもなお、表情が見えない“黒い塊”に寄り添う裸足の少女に、親子の愛情という“救い”が見出せるのも事実である。

臼井の写真表現には時代の諸相とともに復興を目指した戦後名古屋の情景も映し出されている。(J.T.)

臼井 薫《ささやき，名古屋市中区広小路，1951年》

どこがおもしろい?!

今回のテーマは、名古屋を代表する美人画家・渡辺幾春の《若き女》です。描かれたのは大正11年。美人画がジャンルとして確立し、安定した人気を誇っていた時期の作品です。当時の人気作家といえば竹久夢二がおり、彼の描く情緒豊かな美人画が雑誌の表紙を飾り、版画や絵葉書がたくさんの人々に愛されていました。《若き女》からも大正時代の甘くアンニュイな雰囲気がほんのりと漂ってきます。来館者の皆さんはどのような感想を持たれたのでしょうか。2011年４月23日(土)ー６月26日(日)の展示期間にお寄せいただいたご意見を紹介します。

渡辺幾春《若き女》1922〔大正11〕年

「今にも、ふっと顔を上げてこちらを見そうな感じ。柔らかい着物の質感と指のしなやかさや、しぐさの女性らしさが伝わってくる。」(洋子さん 43歳)

「少し物思いにふけっているような、でも幸せそうな表情で、これから嬉しいことがあるんだろうなぁという表情をしている。もしかしたら、これから好きな人と一緒にお芝居でも見に行くのかも。何を着ていこうかしら？とか考えながら、楽しい様子。今も昔も幸せそうな女性の表情は変わらないなぁと思いました。」(MAMさん 31歳)

「うちわもあるので夏なのでしょう。髪もちょっと乱れて、ユカタ？もしわしわになっていることから暑かった感じ。でもうちわも床に置いてるのでだいぶ涼しくなってきた夕ぐれくらいなのかな…。表情もとてもやすらかだからちょうどきもちいい時なのかな。見ているのは当時のファッション誌でしょうか？“こうなりたいな、いいな”と思ってるのかな？」(mrkさん 20歳)

「やっぱエアコンいるよなー」(タチさん 25歳)

「実は寝ているんだと思います。何か色々見ているうちに、日頃の家事の疲れが出て、寝てしまったのです。その証拠に手から絵？が落ちています！」(哲学見習いさん 22歳)

「昔の女性でそのころのプロマイドの絵を見ながら、楽しんでいた時についまどろんでしまった様な。きっと夢の中にあこがれのスターが登場してくれたにちがいありません」(えみりさん 40代)

「歯がいたそう」(ハマチ君 33歳)

「背景やたくさんある絵は全てオレンジや茶系のあたたかみのある色なのに、女の人の着物だけが鮮やかな水色なので涼やかでキレイだと思いました。」(×さん 19歳)

「夏の薄手の着物が汗をふくんだように描かれているところが色っぽい」(るるぶさん 50歳)

「風呂上がりでしょうか？ほんのり赤い肌とうちわからちょっと暑い気温が伝わってきます。まだ若く恋にウブな感じ。男女の浮世絵をみて想像している少女がカワイイです。と思う私です」(つよしさん ？歳)

「片隅に置かれている団扇から季節をうかがい知ることができるが、“若き女”の顔は涼しげである。そうした表情からどことなく気品を感じる。夏の暑い日に、ゆったりと絵を楽しむ感性を持ち合わせたこの女性にひかれた。こういう女性と結婚したい。名古屋市美術館にいらしたらご紹介ください。お願いします。お客さんでもいいです。お願いします。」(グティーさん 27歳)

「若い時の昔の２人の絵を見て、よかったときを思い出しているのかなあ。昔の彼氏からの手紙かなあ。いっしょにいたかった。」(？さん 30歳)

「手のちょうど下にある男女の絵をみて“私もこんな風になりたいなぁ”と思って、その絵の中に女性が自分の姿を重ね合わせて想像しているのではと思いました。色もふんいきもやわらかくとてもきれいな絵で、この絵の中だけ、時間がゆっくり流れているような感じがしました。」(レラさん 17歳)

それぞれのコメントをいただいた皆さんの性別ははっきりわからないのですが、おそらく女性と男性でこの絵の見方が大きく違っていたように思います。女性は「若き女」に感情移入して、今思っていることを想像している方が多いようで、男性は「若き女」のたおやかさや艶っぽさに惹かれる、という意見が多いように見うけられました。「若き女」が眺めている浮世絵には、町方の女性や名所などが描かれているようです。また、浮世絵に紛れて一枚手紙らしきものも見えます。これらに一体どんな内容がかかれているのかわかると、女性の心のうちも余計に察せられるのかもしれません。(nori)

イベントレビュー

東日本大震災から１年…。

あの未曾有の出来事から１年。皆さんは、どのように過ごされてきたでしょうか。

死者・行方不明者は約２万人、避難生活を余儀なくされている人は10万人以上。あの日、東日本において、地震と津波によって被災した人々の衝撃は凄まじいものだったと思います。それ以降、かけがえのない大切なものを失った痛切な思いとともに、精神的にも肉体的にも厳しく苦しい毎日が続いていることと思います。

被災地から遠く離れた場所に暮らす私たちも、被災者の方々の厳しい現状に寄せる思いは深いものがあります。また、私たちの心のなかにも、あの日の衝撃は刻み込まれています。直接的に被災することはなくても、テレビや新聞などでの報道を目にするなかで、間接的に「被災する」ことと同じ思いを感じている方々も多いのではないでしょうか。

このような状況のなかで、初めての３月11日を迎えるにあたって、美術館として何ができるのかということを考えました。

美術は、傷ついた心を慰め、沈んだ心を励まし、悲しい心に喜びを与えてくれます。さまざまな思いや記憶が頭のなかを駆け巡るとき、美術を見ることで、心安らかな時間を過ごすことができます。

このような美術と美術館の力を信じる私たちは、初めて迎える「３月11日を美術とともに」、美術館で過ごしてもらえればと願い、ボランティアの皆さんの賛同と協力を得て、常設展において、「まるごと１日ギャラリー・トーク」を実施することにしました。

当日、来館された皆さんには、ゆったりと美術鑑賞を楽しむとともに、美術と美術館の大切さを感じて、３月11日を「忘れてはいけない日」として、心に刻んでいただけたことと思います。全国美術館会議が設置した、美術作品を救い、美術館に活力を与える募金にも、ご協力いただきました。

また、美術館から「美術の贈り物」として、美術館が保管してきた古い(けれども貴重な)展覧会カタログを無償配布しましたが、来館者の皆さんは思いがけない贈り物に喜んで、熱心にお気に入りのものを探して持ち帰られました。この展覧会カタログが美術を愛する心に小さな芽を出してくれたらと願っています。

美術館の正面玄関には、「アートマイル」と題して、名古屋と仙台の中学校の生徒たちが共同制作した「絆」の美術作品も展示しました。

東日本大震災からの復興には、まだまだ長い時間と労力が必要になると思いますが、美術館としてもできるだけの支援を続けていきたいと考えています。(sy)

イベントガイド

■特別展「いのちの煌めき 田渕俊夫展」

田渕俊夫の45年におよぶ画歴を４章に分け、大学卒業後の初期作品から、院展出品作を中心にした重要作品、装飾性と精神性を特色とする田渕芸術の本質を語るにふさわしい作品を選び、新作３点とともに、47点で紹介します。

会期：４月７日(土)～５月20日(日)

料金：一般1,100円・高大生700円・小中生400円

{関連催事}

※２F講堂・無料・先着180名

・特別講演会「自作を語る」

日時：４月７日(土) 午後２時～

講師：田渕俊夫氏

・講演会

日時：４月15日(日) 午後２時～

講師：神谷 浩氏(名古屋市博物館副館長)

・記念対談

日時：４月22日(日) 午後２時～

講師：田渕俊夫氏、神谷 浩氏(名古屋市博物館副館長)

■常設展 特集 荒川修作の“MISTAKE”

会期：４月１日(日)～５月20日(日)

新たに寄託された作品(５点)を中心に紹介。

■特別展「ポジション2012 名古屋発現代美術～この場所から見る世界」

若々しくフレッシュな感性を持つ10名の作家(青田真也、大﨑のぶゆき、川見俊、坂本夏子、佐藤貢、設楽陸、田島秀彦、判治佐江子、文谷有佳里、山田純嗣)による現代美術の展覧会を開催します。

会期：６月２日(土)～７月16日(月・祝)

料金：一般1,000円・高大生700円・小中生400円

■コレクション解析学

コレクションから１点を選び、学芸員が紹介。

各回午後２時～２F講堂、無料、先着180名。

- **５月13日**(日) 荒川修作《35フィート×７フィート６インチ、126ポンド No.2》
- **７月８日**(日) ポール・ストランド《メキシカン・ポートフォリオ》

休館日は月曜(祝休日の場合は翌日)、５月21(月)～６月１日(金)、７月17日(火)～７月27日(金)です。詳しくはHPhttp://www.art-museum.city.nagoya.jpをご覧ください(ナ)

展評

鈴木淳夫展

2012年１月23日(月)～２月11日(土･祝)
ギャラリーコヅカ スペースグレー・ホワイト

鈴木淳夫は豊橋市の出身､1977年の生まれ。大学院を修了した2001年前後からコンスタントに作品発表を行い、ギャラリーコヅカでは2003年から毎年個展を開いています。

鈴木の作品の特徴は、彫られた絵画であること。木製のパネルなどに何色かのアクリル絵具を塗り重ね､それらの層を彫刻刃を用いて彫ることで作品を作っています。彫られた絵具片も､紙に貼られたり､貼り重ねて団子のようにまとめるなどして､作品にされています。

ひたすら彫りつづける､もしくは貼りつづけることからなる鈴木の制作は､淡々かつ黙々としています。それでも､微細な体調の変化や心の動きが作品の表面に現われ､同じようでありながら豊かな相違を内包する画面を生んでいます。絵画の多くが絵具を重ねることによって形と意味を生み出しているのに対して､彫る鈴木の絵画は取り除いていくことによって形と意味を成り立たせています。余計なもの､不明なものを除いていこうとする姿勢は、鈴木の価値観や世界観を反映しているのでしょう。

この度の個展では、スタンダードな作風である小さな丸い米粒のような形の彫り跡を残す作品の他に、より長い、短い線の彫り跡からなる作品が出品されていました。鈴木はこれまでにも、自分の本質と考え、やりたいと思うこととは別に、折々に気づかれた彫る絵画が持つ表現の可能性を探った作品をあわせて発表しています。自身や花、風景を掘り出したものと同様に、違う彫り方になった今回の試みが、将来どのような成果となって現われるのかが楽しみです。

この度の個展では、以前から考えていたという茶室も実現されています。鈴木は満足していないようですが、完成度は高く、納まりが良過ぎて、「出来過ぎ」の感がありました。彫りの技術の熟練ともあわせて、工芸に通じる側面もある鈴木の作風では、用心すべきところであるように思われました。(み。)

会場風景：いずれも《カーブドペインティング》2012年

展評

あいちアートプログラム
アーツ・チャレンジ2012

2012年２月14日(火)～２月26日(日)
愛知芸術文化センター

アーツ・チャレンジは、愛知芸術文化センター内の展示可能な公共空間を使った公募企画展で、2007年から毎年、十数名の新進作家が選考され展示を行い、30万円の活動奨励金が与えられる。同時期に芸術大学の卒業制作展が開催されていることもあって、この時期に同センターを訪れることは私にとって若い新進作家を知るいい機会になっている。公募で発表の場所と展示の支援が得られるこの企画は、若手作家のチャレンジの場として定着してきているのではないだろうか。６月に名古屋市美術館で開催するポジション展の出品作家、川見俊と文谷有佳里も過去にアーツ･チャレンジを経験している。

今回は、展示場所が減り選考された作家は10名､規模が小さくなったせいか､展示作品もどこかこぢんまりとして感じられ、若さゆえの無謀なチャレンジ性といった感じはなかった。作品が展示される場所は愛知芸術文化センターの残余スペースとはいえ、Ｂ１Ｆや２Ｆの吹き抜け空間など、場所によっては恐ろしくスケールの大きいところもある。まばらに展開してしまうと、作品の存在感よりも場所との違和感が変に目についてしまう。このような展示は、やはりもっと規模を大きくして若い作家さんのフレッシュな感性がはちきれんばかりに館内のあちこちで展開していたほうがいいのではないか。とはいえ､今回作品のレベルが低かった訳ではなく、芸術文化センターの様々な空間やその可能性に気づかされ、日々移り変わる世の中を見つめる若い作家の視線を感じることができた。街中で人とコミニケーションすることで得られる情報からニュース番組を作るタニシKや、本を解体して美しい折り紙細工のように新たな造形を作り出す益永梢子、刺繍したテキストとオブジェとして配置された日用品によって遠い昔の記憶をたどる牛島光太郎の作品など、全体的にどこか内省的で、人間のつながりとか再創造といったことを思い起こさせられた。３.11以後を生きる私たちの感性が反映されていると感じずにはいられなかった。(hina)

牛島光太郎《意図的な偶然》

BOOK

『日本の近代美術』

土方定一 著、岩波新書、1966年

学芸員として仕事をしてきて､最近､とくに感じるのは、『日本の近代美術』に対する関心の低下です。世紀が変わる頃から､急速に人気が衰えてきたように思います。名古屋市美術館でも､これまでに特別展として､浅井忠展、荻須高徳遺作展、北川民次展、小磯良平遺作展、小出楢重展、三岸好太郎展を開催してきましたが、次第に陰りが見えてきています。

かつて日本の現代の文化・芸術について考察する場合、明治維新による急速な近代化のなかで、西洋の文化・芸術が移植され、日本のなかで展開していく歴史を顧みることが重視されていました。「和魂洋才」という言葉に象徴されるように、日本の伝統を踏まえた上で、どのようにして西洋の文化･芸術を吸収･消化して、日本の新しい文化・芸術を創造するのかということが重要な課題として意識されていたのです。

『日本の近代美術』は、そのような「和魂洋才」の在り方を明らかにする典型的な文化・芸術として注目されていたのです。激しく個性的な夭折の画家たち(青木繁、岸田劉生、佐伯祐三、村山槐多、関根正二など)や豊穣な画風の長寿の巨匠たち(梅原龍三郎、熊谷守一など)はとくに人気を博していました。

本書は､このような『日本の近代美術』の歴史を､時代背景を踏まえて､簡潔明瞭に解説した古典的な入門書です。著者は､日本で最初の公立近代美術館となった神奈川県立近代美術館の初代館長を勤めた美術史家として有名です。

長らく絶版状態で入手困難であった(2010年に、文庫版も新たに出版された)のですが、最近は全国チェーンの古書店でも見かけるようになりましたので、気軽に読んでみてください。(sy)

展評

「村山槐多の全貌～その芸術の真髄と大作の謎？山本鼎との真実」

2011年12月３日(土)～2012年１月29日(日)
岡崎市美術博物館

夭折の画家村山槐多の全貌に迫る展覧会が岡崎市美術博物館で開催されました。担当学芸員が20年以上の調査研究を重ねて実現したというこの展覧会、質・量ともに大変充実した内容のものでした。

やや暗めの展示室に足を踏み入れると、まず、槐多が14､5歳の頃に描いた作品に出会うのですが、これらがなんとも味わい深く､「槐多は最初から槐多だったんだなあ。」としみじみ感じさせるような作品が並んでいました。多感な年代のさまざまな感情や大正という時代の独特の空気も感じられ、最初から展覧会への期待が高まります。その後、画家になるために上京し、やがて大作制作への意欲を抱く槐多ですが、この展覧会の見所の一つである、謎の大作《日曜の遊び》は、非常に様々な角度から調査研究され、結果、それまでの山本鼎制作という説から一転して、槐多の作という見解が示されています。実際にこの作品を見てみると、確かに槐多特有の雰囲気が漂うようにも感じられ、下書きを山本鼎がしているという解説などを読むと、山本鼎が一体なぜ、そしてどこまでこの制作に関わったのかという興味も沸いてきます。槐多自身はこの作品を失敗作としていて､そこから逆に､本物の槐多が生まれる転換点となっていった、という意味において、この作品は展覧会の展示構成のターニングポイントともなっていました。この作品以降の槐多は、《尿する裸僧》に代表されるような、情熱のありったけを激しくぶつけたような作品を次々と描いていき、まさに｢槐多そのもの｣となってゆきますが､そのくだりも大変見ごたえがありました。

情熱の画家村山槐多を相手に調査研究、準備を進めてこられた学芸員の方が槐多と真正面からぶつかるだけの熱意を有していなければこのような企画は実現しなかったことでしょう。この展覧会には全国から熱狂的ともいえる槐多ファンが訪れたようですが、若くして亡くなったこの画家の作品がこうして後世において沢山の人々に愛される機会を与えられたということは、画家自身にとっても、観る我々にとっても素晴らしいことだと感じました。(akko)

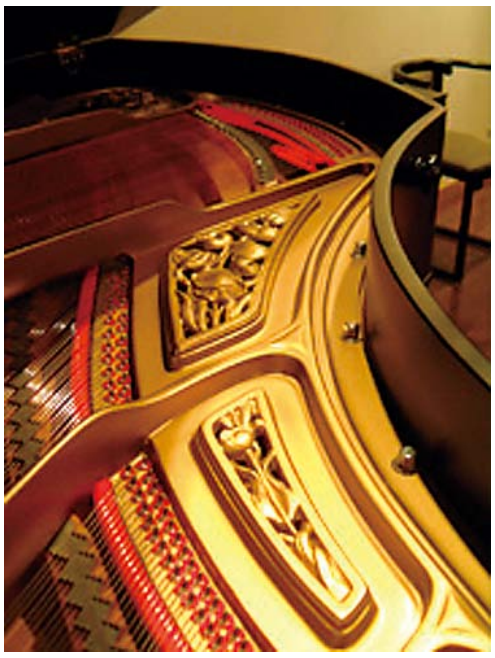
村山槐多《尿する裸僧》1915年　信濃デッサン館蔵

CULTURE, MOVIE,DRAMA&MUSIC

芸術館菩提樹

長久手に｢芸術館菩提樹｣というスペースがあるのをご存知でしょうか？長久手の住宅地の中にひっそりとある、一見普通の民家風の建物ですが、中に入ってみてびっくり。そこにはウィーン工房のデザインの椅子があり、100年前にドイツのイバッハ社で作られたピアノがあり、さまざまなウィーン関係の書籍が揃っています。このこぢんまりとした場所で、時には子ども向けのオペラが上演されたり、時には大人を対象としたコンサートが行われたりと､さまざまな楽しいイベントが開催されています。このスペースはもともと、ウィーンに魅せられ、音楽を愛した大島千佳さんが運営していたのですが、残念なことに大島さんは若くして亡くなられてしまいました。その後､大島さんの想いを伝え続けていきたいと考えた有志の方たちによって､このスペースでのイベントが継続されています。先日伺ったコンサートでは､バレンタインが近いということもあり､愛をテーマにした曲が演奏されました。また、この日はテーブルと椅子をカフェのように配置して、歌手の方が腕をふるったケーキと紅茶を楽しみながらのコンサートとなりました。演奏者がいろいろな話をしながら、終始和やかなムードで行われたこのコンサート、一般的なクラシックのコンサートとは違った、音楽を身近に感じられるような趣向で行われていて､とても好感が持てました。演奏したヴァイオリニストの方は最後に､「楽しく､でも､本物をお届けしたい。」と言っておられました。「本物」とは何か？音楽において「本物」とは､やはり､聴く人の心に染み入るようなもの、なのでしょう。テクニックは大切ですが､それだけではない､という奥深いものがあります。そして､コンサートにおいては､それが提供される空間や、演奏者との対話などといった雰囲気もまた重要です。「菩提樹」は、それら全部をひっくるめて、訪れる人に心地よい空間、心地よい体験を提供しようとしている､そういったスペースだと思います。有志の方たちによるこのスペースでの活動には苦労も伴うのでしょうが、他にはないこの空間で今後も様々なイベントが開催されてゆくことを期待したいと思います。(akko)

芸術館菩提樹
〒480-1103 長久手市岩作早稲田8-1
お問合わせ：info@bodaiju.net


芸術館菩提樹所蔵のイバッハ社のピアノ

【編集後記】
2011年３月11日２時46分、東日本大震災から１年が経過しました。振りかえろうにも、未だ復興という言葉からは程遠い被災地の状況や未だ議論が続く福島の原発事故対応が日々情報として流されている中迎えた３月11日。当館でも､被災地への支援という思いを込めて､様々なイベントを開催いたしました。名古屋では、ウィメンズマラソンが開催され、中間ゴールに設定された白川公園は多くの人で賑わい、その影響もあって美術館にはたくさんのお客様が来場してくださいました。ご来場いただいたお客様からは、全国美術館会議によって被災地の美術館の活動を支援するために設置されている募金箱に、34,713円の募金が寄せられました。復興のためには、私たちもまだまだやれることを見つけていかなければなりません。とはいえ、３月11日という日を迎えて改めて、あの日を境に、身近な生活から様々な社会的な状況、さらには私たちの感性そのものも変化せざるを得なかったことをしみじみと思い知らされました。(hina)

アートペーパー第89号 発行日：2012年４月１日
発行 名古屋市美術館
[芸術と科学の杜・白川公園内]
http://www.art-museum.city.nagoya.jp/
〒460-0008
名古屋市中区栄二丁目17番25号
地下鉄《伏見駅･大須観音駅･矢場町駅》下車
Tel.052-212-0001 Fax.052-212-0005
休館日：毎週月曜(祝日の場合は直後の平日)
開館時間：午前９時30分～午後５時
祝日を除く金曜日は午後８時まで
※入場は閉館の30分前まで
Nagoya City Art Museum

古紙パルプを含む再生紙を使用しています。

執筆者／深谷克典(F)、山田諭(sy)、中野毅(ナ)、竹葉丈(J.T.)、角田美奈子(み。)、原沢暁子(akko)、笠木日南子(hina)、清家三智(3)、保崎裕徳(nori)